

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

ジャウィ習字のカリキュラム化をめぐって

坪井祐司 (名桜大学上級准教授)

マレーシアでは、来年から小学校のマレー語の授業カリキュラムのなかにジャウィ (アラビア文字によるマレー語表記法) の習字 (Khat) を組み込むことをめぐり、論争が起きている。Khat の導入を進めようとした政府に対して、華語学校関係者など、非マレー人の団体から批判が起こった。教育省は、Khat の導入自体は譲らなかったが、華語、タミル語の国民型学校においては導入に際して P T A などの了解を取る (必修としない) と表明した。



現在でもモスクではさまざまな書体のジャウィが見られる (ペナンで筆者撮影)

Khat のカリキュラム化の名目は、マレー語の芸術性を学ぶというものである。漢字の書道と同様に、宗教とは関係ないというわけだ。確かに、アラビア文字による書道は、イスラム世界における芸術の一部として発展してきた。偶像崇拜を禁じ、人間を造形に取り入れにくいイスラム教の芸術文化では、文字はデザインの重要な要素である。アラビア文字には多くの書体があり、マレーシアの街中でも、コーランの一節や「アッラー」「ムハンマド」のような単語がさまざまな場所やモノに趣向を凝らしてデザインされているのを見ることができる。

しかし、これを教育内容に含めることに宗教性、政治性がないとはいえないだろう。近年のマレーシアでは、ジャウィへの関心が復活してきている。自前の文字を持たないマレー語の表記法は、時代とともに変遷してきた。アラビア文字はイスラム教とともに到来し、それを改変したマレー語表記法のジャウィが普及した。

しかし、イギリスによる植民地化とともにローマ字表記が導入され、独立後も公式の表記法として採用された。ローマ字が多民族社会の中で最も共有しやすい文字であったためである。現在ではマレー語はほぼすべてローマ字で表記されている。ジャウィを実際に使用していた層は高齢化し、今やジャウィをすらすらと読めないマレー人も少なくない。しかし、「イスラム化」と呼ばれる社会的なイスラムの強まりとともに、聖典コーランの文字であるジャウィが見直されるようになった。小学校の宗教の科目でジャウィが教えられるようになり、若い世代の関心も増している。

くわえて、ジャウィはマレー人の民族文化とも意識されている。多くのマレー人にとって、イスラムはアイデンティティの重要な部分を占める。しかし、イスラム世界のなかで、東南アジアは地理的にも文化的にも中心とは言いがたい。聖典の言語であるアラビア語はすべてのマレー人が理解できるわけではない。宗教と民族という二つのアイデンティティをつなぐのがジャウィであり、マレー人は自前のイスラム文化としてジャウィをとらえなおしたのである。

一方、多民族・多宗教社会のマレーシアにおいて、教育のような公共の領域でマレー人という特定の民族文化や宗教を強調しようとする、他者からの反発を呼ぶことになる。民族問題はマレーシアにとってセンシティブ・イシューであり、公的な場で議論することはできない。しかし、文化や芸術、教育など関連する領域において、常に形を変えながら論争やせめぎ合いが起きているのである。

< 筆者紹介 >

東京都生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了、博士(文学)。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所機関研究員などを経て現職。専門はマレーシア近現代史。イギリス植民地期を中心にマレー人という民族集団の形成過程を研究しており、マレー語(ジャウィ)による出版活動も対象の一つ。著書に『ラッフルズ 海の東南アジア世界と「近代」(世界史リブレット人 68)』(山川出版社、2019年)。